

近藤清石について

▼近藤清石は萩藩士・大玉新右衛門の第三子として、天保四（一八三三）年萩に生まれ、十七歳のとき近藤源右衛門（義介）の養嗣子となった。
▼幼児より才知衆童にすぐれて明敏。萩明倫館に学び、硯学近藤芳樹・土屋蕭海に就く。その後、郷を出で諸名家の門をたたき、万延元年より藩に出仕。雨来史官として参与すること十余年。明治四年には近藤芳樹に従って「王代一覽」の校正にあたり、次いで「天皇正系」編制に従事した。
▼明治十八年、一切の官職を退き、雨来大正五年、八十四歳の高齢を以て逝去するまで、三百年にわたって蓄積された防長史料の集大成に尽くした。



山口の特産工芸品となった美術漆器・大内塗りの復古再現に尽くしたことも知られている。
▼その人となり、謹厳高潔、容姿端偉。厳格の中に慈父の趣があったという。明治以来わが県の偉才はことごとく上京し、軍官に名をなしたが、郷土に留まって、終生、県の文運発展に尽くしたその生涯は特筆に値する。
▼著書多数、その殆どは防長二国の史実に關するもの。主著に大内史実録、大内史実録土台、山口県風土誌、山口県史略、防長旧族志、防長金石文誌、防長人物誌ほかである。

体裁

A5判四六〇頁
クロス装製製箱入

定價

七〇〇〇円
(千380)

予約特価

五〇〇〇円

予約締切

94年12月20日

発売

95年2月中旬

出版部創設20周年 記念特価提供

▼僅少部数のため、売り切れの際はあいはい、ご容赦願います。

▼書店への卸売は致しません。小社へ直接お申し込み下さい。

〒745 徳山市銀座2
808-3402195 マツノ書店

志第一

本編のこと、既に凡例中にいへるが如く、原書を次第するを以て仮字違、てにをは違、語格違、誤字、衍文も敢て改正せずといへども、かな書の場合は、訓の清濁にて、甚しきあやまりを生ずることなれば、濁音に訓むべきには其しるしを附せり。覽者之を諒せよ。

上由来を申せば、百濟国第三王子琳聖太子、日本周防国多々良の浜と云所へ来朝なされ、それより難波都へ略登りまし、聖徳太子と御対面ありて、御法問の御事など事多ければしるさず。御下向ありて國の守護預り奉りて、幽なる御栖にて有しか、智略を以て多くの國を切り御繁昌なされて、其後防州山口と云所に屋形をたてられ、築地の数どもあまた出来て、次第に家の法度を定、政道を専とし給ふ。毎日早旦の出仕の人は、七間と云厩の侍にて着到に付て退出也。四時の太鼓を打ければ、童部衆の役にてかの着到を披露なり。夜番着到をば当番の奉行人披露して、參不參の旅を存らる。同じき時分より式諸人の申事、或は訴論の公事の沙汰とりどりに披露也。落着有がたき事共をば、面々衆奉行人評定して申さる。それにても分別なき事をば外記官務の沙汰也。諸公事披露の時刻などは、当時の人々の気色なりとぞ聞えける。八太鼓を打ぬれば各奉行退出あり。御伽衆出仕にて、雪月花の折々は当座の御歌を讀給ひ、披露などの御沙汰あり。出仕の人に随ひ、それ家々さまさまの御物語、詩歌管絃の御難談ばかり也。扱十二月廿五日の煤はきの其日より、万事公事沙汰を止られけり。先青陽の春の規式には、元日より一族面々、近習、奉行人、小坐敷衆、外

111 志第1

内容見本 (部分)

大内氏三百年の盛衰

大内氏實録

近藤清石著
三坂圭治校訂

マツノ書店

目次

世家第一	弘幸	冷泉隆豊(附松原隆則)	黒川隆像	岡部隆景
世家第二	弘世	天野隆良	大田隆通	岡部隆秀
世家第三	義弘	列伝第八 死事	陶隆康(子隆弘)	相良武任
世家第四	弘茂	列伝第九 遭難	二条尹房(子良豊)	三条公頼
世家第五	盛見	列伝第十 文苑	小槻伊治	岡崎氏久
世家第六	持盛	列伝第十一 方伎	岡昌歳	園広忠
世家第七	持世	列伝第十二 烈女	相良正任	持明院基規
世家第八	教弘	列伝第十三 嬖幸	南村梅軒	渡辺可性
世家第九	政弘	列伝第十四 反逆	竹田定慶(子定詮)	宗阿弥
世家第十	義興	列伝第十五 帰順	中將局	宰相局
世家第十一	義隆	列伝第十六 陶晴賢家人	安富源内	清四郎
志第一		附録	大内義長	陶晴賢(子長房)
志第二		汲古集	重見通種	問田隆盛
表			杉重矩(子重輔)	正重 某
列伝第一 妻妾	弘世三条氏 義興側室内藤氏 義興室万里 小路氏 義隆継室広橋氏 義隆側室広橋氏		内藤隆盛(孫隆世)	青景隆著
列伝第二 宗室	長弘(子弘員・弘貞) 弘直 師弘 満弘 (子馬場殿満世) 教幸 晴持 義尊		弘中隆兼(子中務。附僧了善)	飯田興秀(子長秀)
列伝第三 女子	問田亀鶴 輝弘		江田安芸新五郎	阿川隆康
列伝第四 親族	右田弘量 陶弘房(子弘護 弘詮 孫興房 曾 孫興昌) 陶持長 問田弘胤(子興之)		右田隆量(子隆俊)	陶隆満(子隆秋)
列伝第五 諸臣	杉重運(子備中守) 平井道助 佐波隆連 小幡山城守 貫隆仲 杉興運		(子長宣)	内藤隆春
列伝第六 附庸	吉見信頼 友田興藤(子広就) 黒川隆尚 平賀隆保 益田藤兼 吉見正頼		仁保隆慰	梶杜隆康
列伝第七 殉難			大庭賢兼	白井賢胤(子晴胤)
			祐次 弟安定 氏信	楊井国久(子武盛)
			伊香賀房明	柿並佐渡守
			良房榮	三浦越中守
			勝屋右馬允	江良主水正
			川伊豆守	伊香賀左衛門大夫
			附録	大内系図
			大内系図	大内殿有名衆
			大内系図	大内殿家中覚書
			汲古集	

刊行にあたって

▼大内氏研究に生涯を捧げた近藤清石の『大内氏実録』和本全五巻が出版されたのは明治十八年である。その実証的態度と成果は、幾多の星霜を経た今日においてもなお不動の価値を維持し、燦然たる光彩を放っている。

▼近年、守護大名や戦国大名への関心が高まり、大内氏関係の著者・論文も多く現われてきたが、それらのすべてが研究の基礎固めにあらず参考すべき文献こそ、この『大内氏実録』なのである。

▼その内容は、右の目次でも明らかな通り、大内氏歴代の世家、家臣の列伝、大内氏壁書その他の志、系図など諸般に及んでいる。

▼しかしながらこの原著は稀観本で、容易に入手できるものではなかった。小社では三坂圭治氏の厳密な校訂を経て、昭和四十九年、本書を新活字に組み替え、洋本全一卷として刊行した。これは小社の記念すべき処女出版でもあったが、刊行後ただちに売り切れ、これも稀観本となった。

▼そこで昭和五十九年、「出版部創設十周年」を記念して、本書の巻末に新たに大内氏関係の歌集、近藤清石編『汲古集』を付け加えて再版したが、それもすぐ売り切れた。

▼このたび「出版部創設二十周年」を記念して、ここに第三版を刊行するものである。